

古関裕而と福島との関係性

刑部芳則

目次

はじめに

- 一 戦中・戦後の福島県民への思い
- 二 福島県の地域振興
- 三 福島県に広がる社歌・団体歌・イベントソング
- 四 作曲数が多い福島県の校歌
おわりに

要旨

本論では、古関裕而が作曲した福島県の社歌、団体歌、校歌について検討する。古関の福島に対する思いや人柄について検討し、福島県にとって特別な存在になったことを解明する。

はじめに

古関裕而は福島県民が誇る偉大な作曲家である。昭和五十二年（一九七七）十一月に福島県外在住者知事表彰を受け、同五十四年（一九七九）四月には福島市名誉市民の第一号に選ばれている。昭和五十六年（一九八一）十一月には福島県芸能県人会代表となり、同六十三年（一九八八）十一月には福島市制八十周年事業として古関裕而記念館が開館した。平成元年（一九八九）八月に死去すると、同三年十一月から古関裕而音楽祭が始まった。令和二年（二〇二〇）度のNHK朝の連続小説ドラマ「エール」のモデルとなり、再び脚光を集めたことは記憶に新しい。

「エール」の経済効果は福島県に約八億円の商業利益をもたらしたという。想定外のコロナ禍の悪影響により観光客の数が減らなければ、その効果は

もつと大きかったに違いない¹⁾。福島市古関裕而記念館を管理する福島市、地域振興を図る福島県商工会議所は、「エール」の実現化に向けて署名活動を実施し、実現決定後には盛んに古関を主体にしたイベントを開催した。

福島県にとって古関は地域振興の大きな存在となつている。これは昭和五十年代以降に彼を顕彰している流れからもわかるように、一朝一夕にして生まれたものではない。福島県芸能人会が発足したように、福島出身で活躍した文化人は少なくない。しかし、そのなかでも古関に対する顕彰および注目度は他者を圧倒している。

そうした理由を、国民栄誉賞を受賞した古賀政男や服部良一と肩を並べて、昭和流行歌の三大作曲家となつたからだと見るのは単純である。その理由を説明するには、職業作曲家となつてからの古関裕而と、福島県との関係性について分析しなければならぬ²⁾。筆者は古関の基本的な音楽人生について描いたが、この課題については残された³⁾。

そこで本論では、古関が職業作曲家になつてから福島県の会社、団体、学校などからの依頼に応じて作曲した作品に注目し、彼がどのような姿勢でそうした仕事を行つていたのかを検討する。古関が福島県にとつて重要な存在になつたのは、作曲を依頼する側と、それを引き受ける古関の思いとの相互作用が大きかったと考えられる。本論の執筆に際して

は、福島刑務所をはじめ、福島県内に残る貴重な史料を発見した。新出史料を使いながら、古関の福島に対する思いや人柄について検討し、彼が福島県にとつて特別な存在になつたことを説明する。

一 戦中・戦後の福島県民への思い

古関裕而が最初に発表した新民謡は、昭和六年（一九三二）六月に発売されたデビュー曲「福島行進曲」（歌：天野喜久代）と「福島小夜曲」（歌：阿部秀子）である。古関は「福島行進曲」を作詞した野村俊夫と小学生の頃からの知り合いであった。野村が福島民友新聞社の記者として紙面に詩を発表していたとき、古関はそれに曲をつけていた。「福島小夜曲」は、福島で開かれた竹久夢二の個展に展示されていた「福島夜曲」の詩に曲をつけたものである。古関の福島に対する思いは彼のデビュー曲から始まつていた。

古関裕而がヒット曲を量産する契機となつたのが、昭和十二年（一九三七）七月に起つた日中戦争である。彼が持つクラシックの勇壮な曲調と、大衆が好む感傷的な短調の曲調とを融合させた点が受けたのである。昭和十二年八月に発売された「露営の歌」（作詞：藪内喜一郎、歌：中野忠晴、松平晃、伊藤久男、霧島昇、佐々木章）は五十六万以上の大ヒットとなつた。コロムビアレコードでは、各種団

体の企画や新聞社が募集する「時局歌」などを製作した。一躍人気となった古関には、レコード会社を介してそうした作曲の仕事が増えた。

その一つが昭和十三年（一九三八）五月一日に『福島民報』が募集した「銃後県民の歌」である。十五日に古関は福島民報社を訪れて作曲を快諾し、二十一日には親友で福島ハーモニカ・ソサイテーターの主催者の橘登とともに再び福島民報社に足を運んでいる。社長や編集局次長らと会見した古関は、「銃後福島県民の歌を作曲することは福島県出身たる私の最も喜びとするところです、今から張り切つてみます」と語った。

「銃後県民の歌」の歌詞は、昭和十三年五月二十五日に募集を締め切り、選考結果は六月二十日に発表された。応募総数九百七十二編から高村光太郎の次女で小学校教員羽賀松子の作品が選ばれた。七月二十日に発売された「銃後県民の歌」のレコードは、伊藤久男と霧島昇が歌唱し、野村俊夫の作詞で霧島の歌唱による「郷土部隊進軍歌」とカップリングされた。「作詩者も作曲者も歌手も本県出身」というのも売りであった。「銃後県民の歌」は県民歌や市民歌のように明るくい行進曲調だが、「郷土部隊進軍歌」は力強くも哀愁がある。

レコード発売三日後の昭和十三年七月二十三日、福島第一小学校で「銃後県民の歌」の発表練習会が開かれた。小学校の校庭に五千人の県民が集ま

り、第一小学校児童による「郷土部隊進軍歌」の演奏も披露された。古関は「発表を祝し、県民そろって歌わんことを望む」と祝電を送っている。「郷土部隊進軍歌」は「露営の歌」に似た曲調であり、この曲は古関が福島県民のために書いた「第二の露営の歌」と評価できると考えられる。

昭和十六年（一九四一）十二月の太平洋戦争の開戦後には、戦時歌謡の騎手として大活躍する。仕事が多忙ななか、昭和十八年（一九四三）十二月には母校福島商業学校（現・福島県立福島商業高等学校）の恩師丹治嘉一からの依頼で「福商修練隊歌」を作曲している。昭和十六年四月十九日に結成された修練隊は、従来の運動部や文化部を再編したものである。昭和十八年十二月十九日付で丹治に宛てた書翰で古関は、「修練隊歌にふさはしく、力強いものになりましたが、その中に若人らしき新しさを幾分取入れました。音域も成る可く狭くしましたが、これが高い様でしたら一音下げてC長調でやつて頂いても結構です」と説明している。

「福商修練隊歌」の楽譜は、古関が昭和十九年（一九四四）一月に福島へ行ったときに、丹治へ手渡された。その予定を事前に知らせた一月十二日付の書翰では「昨冬頂きましたお手紙に作曲料の事がありました。先輩として母校に何一つ出来ないで居りますので、あの歌で生徒諸君の志気高揚に資すること出来ませ

ならば、小生として、この上もない喜びです」と述べている。古関は求められた曲を奉仕することが、母校や恩師にできる御礼であったと考えていた。

古関の福島や母校に対する思いは、終戦直後にも確認できる。昭和二十三年（一九四八）四月六日に福島商工高等学校（昭和十九年四月に福島商業学校から校名変更）が火災で校舎が焼失する事件が起こった。これを知った古関は、「福島商工高校復興資金寄附募集」を掲げて、当時NHKラジオで人気であった「二十の扉」の福島での中継と、コロムビアの歌謡ショーの開催を企画した。

この件に関して丹治嘉市に宛てた書翰は十通確認できるが、五月四日付の書翰では「藤山（一郎）君との交渉は遂に不調に終り真に申し訳なく平に御許しください」、「藤山のかわりには、伊藤久男、二葉あき子、松田トシ等に白羽の矢を立てて居ります」と、古関が出演者の交渉を行っていたことがわかる。五月二十四日付の書翰では「西條（八十）氏不参の折は、野村俊夫君を引っぱり出しては如何」と提案した¹¹。また古関は「小生の謝礼は絶対辞退致しますから、その分、種々の費用にお廻し下さい」と述べている。この奉仕の精神は、「福商修鍊隊歌」の作曲のときと同じである。

仕事の都合などで共演者は古関の希望どおりとはいかなかった。昭和二十三年五月三十日に福島第一小学校を会場として「二十の扉」は放送されたが、

コロムビアの歌謡ショーは作詞家は野村俊夫、歌手は池真理子、久保幸江など当初の予定とは違うものとなった。古関が提案した「聴衆から出題を求め」、それに応じて野村が詞を書き、古関が即興で曲を作るという「新しい試み」は実現した。古関は、出題から四分間で「福島ブルース」を作曲する神業を見せた。この大イベントは、母校はもとより福島県民を活気づけるものとなった。

二 福島県の地域振興

福島県を代表する民謡「会津磐梯山」は、昭和九年（一九三四年）にビクターの芸者歌手小唄勝太郎の歌唱でヒットし、知名度を全国区に押し上げた。昭和二十四年（一九四九）五月に福島民報社がこれに代わる新しい民謡として、「観光福島」を全国に広める歌として企画したのが「新会津磐梯山」である。この企画に「まず県出身の作曲家古関裕而さんが大乗気」となったという。古関が作曲した「小原庄助さん（新会津磐梯山）」（作詞・野村俊夫、歌・伊藤久男、赤坂小梅、久保幸江、鶴田六郎）と、「懐かしの乙女（福島むすめ）」（作詞・西條八十、歌・霧島昇、奈良光枝）は、昭和二十四年八月に発売された。

コロムビアでレコード化が実現したのには、当時の社長武藤与一、文芸部長伊藤正憲、経理部長瀬谷

藤吉、技術部長須子信一、芸能課長新鞍武千代、同次長坂田哲郎といった幹部クラスが福島県出身者というのも大きかった。昭和二十四年八月には福島民報社が平地方の観光宣伝を目的とした「たいら小唄」の選定を行った。作詞は野村、作曲は古関というコンビで作られた¹⁵。翌二十五年四月に福島民報社は「ふくしま小唄」を選定している。これは吾妻・磐梯国立公園指定を記念した郷土歌謡であった。歌詞募集を行ったものの「新会津磐梯山」や「たいら小唄」と同様に該当者はなく、選者の野村が作詞している。福島の名所を盛り込んだ「ふくしま小唄」(歌・鶴田二郎、久保幸江)は、前章で述べた「福島ブルース」(歌・黒木曜子)とカップリングされて福島県内で頒布された。四月二十日に福島市新開座で行われた発表会には古関も出席している¹⁶。

福島民報社は、阿賀川の電源開発を全国に周知させるレコード製作のため、昭和二十七年(一九五二)一月締め切りで「只見川小唄」(歌・伊藤久男、安藤まり子、若山彰、平野礼子)と「只見川音頭みさこい節」(歌・霧島昇、久保幸江、加藤雅夫、平野礼子)の歌詞を募集した。約七百作品から「只見川小唄」(作詞・丘灯至夫)は該当がなく、「只見川音頭みさこい節」は国分傳三の入選作に、選者の丘が補作することとなった。両曲を作曲した古関も選者の一人であった。コロムビア会長武藤与一と重役瀬谷藤吉は、只見川開発後援会委員を務めていた。そ

うした関係から二月に委託盤のレコード製作を請け負うことになったと考えられる。

古関は昭和二十九年(一九五四)に作曲家生活二十五周年を迎えた。この記念の年に「福島音頭」(歌・伊藤久男、神楽坂はん子)と「東山音頭」(歌・霧島昇、久保幸江)を作曲している。両曲とも作詞は野村で六月に一般発売された。福島観光と会津東山温泉の魅力を全国に宣伝しようとした。両曲とも福島民報社とラジオ福島の選定、福島県観光協会推薦、福島県蓄音器商組合の協賛という力の入れようであった¹⁸。同月には西條八十の作詞で古関作曲の「湯本小唄」(歌・久保幸江、村岡十九夫)も発売されている。こちらは湯本温泉の宣伝歌である。

東山温泉と湯本温泉の宣伝歌に触発されたのが、昭和三十一年(一九五六)に誕生した田村郡小野町の小町温泉である。温泉旅館瀆太屋主人の二瓶章は、小野町出身の丘灯至夫に作詞を依頼した。これを受けた丘は四月六日付の書翰で「作詞は無料奉仕しても作曲料はどうしても四万円位はかかります。ですから、四万円位都合がつくのでしたら、私の作詞で作曲は古関さんがムリなときは長津義司氏に頼んでもよいと思います」と伝えている¹⁹。

そして四月十二日付の丘の書翰では「作曲家の件は(昨夜電話で長津義司氏と申し挙げましたが)やはり古関裕而氏がいちばん良いので、病気の模様を打診したところ、去る六日に退院、大分快方にむい

ているというので、小町温泉音頭の件、内諾を得ておきました。古関先生なら申し分なく、いまでは日本一流の作曲家になっておられるので引きうけてくださるということは大いに喜んで頂いてよいと思います。但し、発表会の日、そちらへ伺うことは出来ませんからお含みおき願います。たいへん安い作曲料なので（古関先生は一曲一〇万円の組です）と報じている。²⁰

ここからは丘が古関の作曲を希望し、自分の作詞料を無料にし、古関の作曲料を相場である十万円から四万円に引き下げて交渉したことがわかる（昭和三十三年の小学校教員の初任給が八千円）。昭和三十一年二月に古関は胃潰瘍で倒れ、関東通信病院で胃の三分の二を摘出する手術を受けた²¹。その退院直後であったが、丘の申し出を快諾している。丘の口利きがあったとはいえ、古関の福島に対する思いがなければ断つただろう。

福島 の地域振興のためなら一肌脱ごうという心意気は、昭和二十九年八月に福島県知事大竹作摩との対談によくあらわれている。古関は「東京あたりからスキーをしに行くとなると必ず志賀高原とか高田とか―新潟や長野の方へ出かけてしまう。つまり、そつちの方が宣伝がきいているんですね。汽車の時間にすれば福島の方が近いんですの。志賀高原のように観光ホテルがないせいですかね。それに宣伝が足りんですね。どうです、知事さん、福島でも

どえらいホテルを作りましてね、東京の客をどんどん誘致したら」、「温泉など数えきれないほどあるのに、知られてるのは飯坂に東山ぐらいいややはり宣伝が足りんですね」と語っている。²²

この発言に大竹は「古関先生にお願いして、別に観光の歌を作つていただいた方が早いかも知れませんが」と提案した。古関は、「いや、もう大分作つているのです」、「『福島行進曲』とか『福島セレナーデ』とか『福島音頭』とか。どうも力及ばず」ところかも知れませんが」と、申し訳なさそうに話している。²³古関は福島 の地域振興を願っていた。

この姿勢は対談後も変わっていない。福島県郡山の和菓子 の老舗柏屋は、昭和三十三年（一九五七）に「旅と土産」をテーマに歌と踊りで地元を盛り上げることを企画した。これに応じて古関が作曲した「しゃくなげ音頭」（作詞：佐藤浩、歌：島倉千代子）は、福島県観光連盟から推薦を受けた。²⁴昭和三十三年（一九五八）には福島県教育委員会が児童から募集した詩を選定した「福島子供盆踊り」（歌：安田祥子、津田崇子、木室博子）、本宮観光協会が歌詞を選定した「本宮甚句」（歌：伊藤久男）を作曲している。昭和三十五年（一九六〇）には福島民友新聞社が磐梯吾妻スカイランの開通記念に制作した「花のスカイライン」（作詞：内海久二〔補作：野村俊夫〕、歌：守屋浩）と「磐梯吾妻小唄」（作詞：片山信次郎〔補作：野村俊夫〕、歌：伊藤久男、能沢

佳子)も手掛けた。昭和四十一年(一九六六)四月二十八日には「阿武隈川の歌」の発表会が開かれている。これは若山牧水歌碑の除幕式の前日に、この歌詞に古関が曲をつけたものである。²⁵⁾

どれも観光産業を中心に地域振興を目的としていた。その最大のものとして企画されたのが、昭和四十五年(一九七〇)の「わらじ音頭」である。福島市、市商店街連合会、福島商議所は、冬の信夫三山眺まいを夏まつりにも行うことを決め、それに際して「わらじ音頭」を作ることにした。福島市長佐藤実と、市商店街連合会長高木善弥は、古関の福島商業学校の先輩であった。その関係から古関に作曲が依頼された。作詞は前年に他界した福島の川柳作家茂木宏哉の作品を、丘灯至夫が補作したものである。二月四日に開かれた会議で佐藤は「古関くんは私(福商)の後輩でときおりタダで曲をつくってもらっているが、今度のワラジ音頭だけはウーンと期待している」と発言し、古関は「眺まいは私の故郷の伝統ある行事だ。だれでも気軽に歌い踊れるメロディーをつくる」と答えている。²⁶⁾

「わらじ音頭」の作曲は四月末頃には完成し、四月三十日に録音された。振り付けは、五月頃に古関が友人の花柳寿楽に依頼した。同じ頃に、天狗の絵を書いた団扇を持って踊るという案が示されると、五月九日付の藪内誠治宛ての書翰で古関は「天狗のうちわとは面白い案だと思います。何か振付けに妙

手が生まれるかも知れません」と、期待を込める返事をしていく。²⁷⁾ また五月十二日付の追伸書翰では、「楽譜に書いてある音の高低に関係なく、掛け声で(シユプレヒ・コールの様に)」、「景気よく掛け声をかけて下されば良ろしいです」と、踊り子の掛け声について指示している。²⁸⁾

古関の熱のこもった作曲姿勢が伝わってくる。「福島わらじ音頭発表会」は、七月五日に福島市公会堂に五千人の市民を招いて行われ、舟木一夫と加賀城みゆきの歌唱で披露された。古関は「郷土のためにはいろいろな歌をつくった。しかしそれもないの間にか忘れ去られてしまっている。わらじ音頭だけは五十年、百年といつまでもふるさとの歌として大事に育てていただきたい」と挨拶した。²⁹⁾

古関が最後に作った新民謡は、昭和五十六年(一九八一)八月に発売された「ふくしま盆唄」である。丘の作詞で、会津若松市の民謡歌手歌川重雄が歌った。だが、これもいつの間にか忘れられていった。一方で「わらじ音頭」は現在でも福島市民に継承されている。古関は福島の地域振興のために多くの楽曲を作ってきたが、その集大成が「わらじ音頭」であった。

三 福島県に広がる社歌・団体歌・イベントソング

古関は福島県内の社歌や団体歌を数多く作曲して

いるが、最初の作品は昭和二十一年（一九四六）十一月二日に制定された「竹田病院院歌」（作詞・土井晩翠）である。³⁰ 作曲の経緯はわからないが、古関との個人的な関係から依頼されたと思われる。それは昭和二十四年五月に発表された東邦銀行行歌の作曲経緯から推測できる。これは創立二十周年記念事業として、前年十一月に行歌の歌詞を行員から募集し、梁川支店長大友文治の作品が選ばれ、選者の西條八十が補作した。副頭取須藤仁郎は古関の福島商業学校の先輩にあたり、その関係から作曲が依頼された。³¹ 選者の西條は古関の紹介と考えるのが自然である。

福島県のイベントソングとしては、昭和二十四年一月十五日の「成人の日」を祝して作られた「成人の歌」がある。福島県耶麻郡慶徳村の小池正が作詞しているため、一般公募の企画として生まれた歌だと考えられる。コロムビアでレコード化はされていないが、「新日本再建」に際して「自分の役割を理解する日」を記念する歌であった。³²

福島県の戦後復興のなかで、昭和二十六年（一九五一）五月一日に東北電力が創設されたことは大きな出来事であった。これにともない古関は、翌二十七年十一月七日に録音された「東北電力株式会社社歌」（作詞・伊沢清、歌・伊藤久男）を作曲している。社長内ヶ崎賛五郎は「日本の再建は東北から、東北の開発は電力から」を目標に掲げていた。東北で開

発可能な水力出力は約二百万KWであったが、この四分の三が只見川に集中していたため、只三川水系の電源開発は最重要施策として推進された。³³ この事情から前章で述べたとおり「只見川小唄」と同じような流れで、古関が社歌の作曲を引き受けることになったと考えられる。

福島県民の水力発電を応援する歌と並行しながら、スポーツイベントに関する歌を作曲している。昭和二十六年二月に「福島県民体操」（コロムビア・オーケストラ）と、「福島県スポーツの歌」（作詞・小林金次郎、歌・藤山一郎）、翌二十七年九月に「第七回国民体育大会讃歌」（作詞・大友真一郎、歌・伊藤久男）と、「マーチ第七回国民体育大会讃歌」（コロムビア・シンフォニック・オーケストラマーチ）のカップリングが発売された。十月から始まった第七回国民体育大会の開催地は、宮城・山形・福島島の三県であった。古関は「福島県スポーツの歌」について、小林に「今まで作ったスポーツの歌の中でも快心の作の一つですよ」と語ったという。³⁴

これらもコロムビアからレコード化されているため、前章で述べた新民謡を発売してきた関係から依頼を受けたと考えられる。昭和二十八年（一九五三）十二月にラジオ福島が開局すると、古関は丘灯至夫作詞の「ラジオ福島の歌」を作曲している。十一月三十日に福島市公会堂で開催された開局前夜祭は、コロムビア・トップライトの司会で伊藤久男などコ

ロムビアの歌手が出演した。昭和三十七年五月の開局十周年記念「コロムビア歌謡大会」には古関と丘も出席している。³⁵「ラジオ福島之歌」はレコード化されなかったが、コロムビアとの関係も加わって古関が作曲したと見てよいだろう。

古関との個人的な関係で作られた社歌は、昭和二十八年四月に発表された「東邦ゴム工業株式会社社歌」である。社歌作成には二本松に会社を誘致させた二本松町長今泉修二が尽力した。今泉は作詞を福島在住の友人で芥川賞作家の東野辺薫、作曲を母方の従兄弟にあたる古関に依頼している。³⁶古関は親戚から作曲依頼を受けたことになる。翌二十九年四月には「日東紡績福島工場の歌」を作曲している。これは社内公募の歌詞を補作した小林金次郎からの依頼だと考えられる。

団体歌として珍しいのが、昭和三十五年十一月十一日に制定された福島刑務所の歌「光に映えて」である。作詞は職員小野小太郎の作品に、高橋掬太郎が補作した。三月一日付で所長高橋清が古関に宛てた依頼状では「受刑者達を新しい施設で明るい環境のもとに修養の日々を送らせたいと願い、ここに所歌を制定した次第であります」、「福島市御出身であらせられ、幾多の愛唱歌を世におくられ、御活躍されている先生に、この機会に是非御執筆頂き度く」と書かれている。³⁷

これを受けた古関は、三月十一日付の返信で「刑

務所の歌を作られると言ふ事は大変結構と存じます、きつと服務して居る受刑者によい影響があると存じます」と快諾し、「小生の叔父が大正年間福島裁判所の判事をして居りまして、時々叔父や叔母と典獄の官舎に伺った事等がありました。今保護観察所になつて昔の刑務所の黒い高い塀は、何かこわい物を見る様で、あの側にあつた典獄さんの官舎に行くのがいやでした。子供心に恐ろしい処と印象づけられた刑務所、その内部から明るい歌が聞える事は本当に嬉しい事と存じます」と述べている。³⁸

また作曲を依頼する書翰には小野小太郎が受刑者に歌わせるために作曲した作品が同封されていた。高橋清は「同職員は收容者の音楽指導を担当して居りまして、作曲について此の機会に先生の御指導を願いたいとの希望がありましたので、楽譜を同封致しましたから、宜敷く御取り計い賜わりたくお願い申し上げます」と重ねて依頼した。³⁹古関は「同封された曲、無難で唱い易いとは思いますが、率直に言つて新鮮味に欠けてる様に感じられます。仰せの通り年齢層に大分開きがあることですから、もつと単純で、面白く唱える曲が良いと思います。弱拍から唱い出す曲は、普通の音楽教養ある者は易いことですが、老人等は、案外唱いにくく、かつ合唱する時に不揃になる恐れがありますから、これはさけたいと思います」と助言している。⁴⁰この点は古関が刑務所歌の作曲に際して意識していたことである。

ところが、古関の繁忙期と重なり、半年を過ぎても作曲は進まず、九月には高橋から督促の書翰を受けた。十月二十四日付で完成を報じた古関の書翰では、「御希望する曲は出来たと思つて居ります」、「明るい社会に再出発される事を作曲者として望んで止みません」と伝えている。⁽⁴¹⁾忙しくても依頼された仕事は疎かにせず、最善を尽くす人柄が見て取れる。所歌は依頼どおり更生に向けた明るい楽曲に仕上がっている。

前述の「福島県スポーツの歌」以来、古関は小林金次郎が作詞した福島県内の団体歌や校歌を作曲している。小林は福島師範学校附属小学校で古関の一年後輩にあたる。昭和八年に福島県師範学校を卒業すると、昭和四十四年（一九六九）まで小学校や中学校の教師をつとめながら、詩や作文を作るのが趣味であった。⁽⁴²⁾教師を定年退職した昭和四十四年の六月二十一日に制定された福島県心身障害者総合福祉センターの歌「仕合わせ星が歌つてる」を作詞した。

これは同センター所長青木二郎の「手足の不自由な人達の社会復帰を目ざし、職業訓練を励ます為」、「何とかしてそれらの人々に明るい希望を持たせるような歌曲が欲しい」という要望に応えたものである。六月二十一日のセンター創立十五周年記念式典には古関も出席し、「仕合わせ星が歌つてる」の指導を行った。⁽⁴³⁾同じような経緯で作られたのが、昭和四十九年（一九七四）七月の障害者支援施設の「け

やきの村讃歌」と、同五十三年（一九七八）の総合社会福祉施設太陽の国の歌「明日も太陽があるから」である。両曲とも福島在住の小山由起夫が作詞している。

作詞家野村俊夫との関係では、昭和四十年（一九六五）に「協三工業株式会社歌（協三工業工場歌）」、翌四十一年に「福島トヨタ社歌」を作曲している。前者は史料が現存しないため経緯はわからないが、⁽⁴⁴⁾後者は十月に創立二十周年を記念して制作された。野村は若い頃に福島トヨタの社長角田林兵衛の使用人として働いていた。その縁から野村に作詞を依頼し、彼を介して古関が作曲することとなった。⁽⁴⁵⁾

野村とは昭和四十年四月四日に制定された猪苗代町の国立磐梯青少年交流の家の所歌「若人の道」も手掛けた。また古関は、昭和四十年八月の日進堂印刷所社歌「伸びゆく日進堂」、同四十一年十一月の「大東相互銀行の歌」（作詞・河西新太郎、歌・伊藤久男）、同四十七年（一九七二）八月の「梅村建設株式会社の歌」（作詞・竹内義春、補作・内海久二、歌・三鷹淳）を作曲している。⁽⁴⁶⁾

福島県内のイベント曲として大きなものに昭和四十九年の第二十九回国民体育大会冬季大会スキー競技会（以下、猪苗代国体と略称）のファンファーレ、讃歌、行進曲がある。古関は、昭和四十七年十月十五日に曲のイメージづくりのため、完成間近いス

キー場を見物した。翌十六日に対面した福島知事木村守江から「福島イメージアップと大会に集う若者にマッチするよう立派な曲をお願いします」と挨拶されると、古関は「行進曲に本県の民謡を取り入りたいが、テンポが難しい」と語っている。

猪苗代国体は昭和四十九年二月十七日に開幕した。いわき市出身の草野心平が作詞した「国体讃歌」は、格調が高く迫力のある古関のクラシック音楽の要素があらわれている。古関は「草野先生のすばらしい詩を読んで、うちに旋律が浮かんできました。しかし、大回転、躍進、ジャンプの部分は難しかったです」という。行進曲は、途中で「国体讃歌」をマーチ風にアレンジしており、古関が快心の出来と自負する「オリンピック・マーチ」に引けをとらない傑作といえる。

自身の曲を開会式で聴いた古関は、「秀峰に明日をひらくというテーマ通り磐梯山もくつきりと見えてとてもよかった。今回の開会式はケバケバしいハデさはなかったが、若さがあふれており、私の作った賛歌にしても、ここまでよく歌いあげてくれてうれしい」と感想を述べている。「オリンピック・マーチ」が全国各地のために書いてきた曲の集大成だとすれば、猪苗代国体の賛歌と行進曲は福島のために書いてきた曲の集大成であったと位置づけられる。

四 作曲数が多い福島県の校歌

古関は全国の校歌を昭和五年（一九三〇）から六十年までに三百曲以上作曲している。⁽⁵⁰⁾ そのうち百十二曲が福島県の校歌（応援歌、讃歌、寮歌などを含む）である。作詞家別で見ると、作詞家丘灯至夫が十二曲、和田甫が十二曲、盟友の野村俊夫が十二曲、草野心平が七曲、恩師の坂内萬が六曲、恩師の遠藤喜美治が五曲、小林金次郎が四曲、梁取三義が三曲を作っている（表を参照）。

遠藤は古関が小学生時代に作曲に目覚めるきっかけを与えた国語教師であり、坂内も古関の才能を早くから認めていた福島商業学校の教師である。両者は古関にとって特別な存在であり、頼まれれば進んで引き受けたに違いない。

作詞者に古関と懇意であった人物が含まれていることからわかるとおり、福島の校歌作曲には古関の知人が依頼することが多かった。その一例が昭和二十四年十月二十六日に発表された「福島県立原町高等学校校歌」である。作詞は前年に校長から依頼された同校教員多田利男が行った。⁽⁵¹⁾ 多田は戦時中に大政翼賛会文化部副部長を務めており、その折に古関と知り合った。その縁から古関に作曲を依頼している。⁽⁵²⁾

作曲依頼を快諾した古関は、昭和二十四年五月四日付の多田宛て書翰で「五・七調は、どうしても感

古関裕而と福島との関係性

表 古関裕而作曲の福島県内の校歌一覧

	校歌の学校名	作詞	作曲年月
1	福島県立福島商業高等学校（青春歌）	坂内萬	昭和5年9月
2	福島市立大森小学校	遠藤喜美治	昭和5年
3	福島高等商業学校「世界の転機に」	沼波瓊音	昭和5年
4	会津津坂下町立広瀬小学校	佐々木信綱	昭和6年
5	私立福島成蹊女子高等学校	坂内萬	昭和14年6月
6	矢吹町立矢吹小学校	遠藤喜美治	昭和15年6月
7	郡山市立御代田小学校	遠藤喜美治	昭和15年10月
8	要田国民学校	遠藤喜美治	昭和16年頃
9	中村高等女子職業学校	松田一	昭和16年
10	中村高等女子商業学校	松田一	昭和17年
11	福島県須賀川商業学校	斎藤清三	昭和17年
12	桑折町醸芳国民学校	野村俊夫	昭和19年
13	郡山市立三和小学校	星孝太郎	昭和19年頃
14	原町国民学校	不明	不明
15	会津農林学校（寮歌）	不明	不明
16	金山村金山尋常高等小学校	橋本春蔵	不明
17	福島市立飯坂小学校	野村俊夫	昭和20年10月
18	会津若松市立第四中学校	坂内萬	昭和22年11月
19	福島県立平工業高等学校	土井晚翠	昭和23年8月
20	福島市立北信中学校	安孫子省三	昭和23年12月
21	福島県立原町高等学校	多田利男	昭和24年4月
22	本宮市立本宮第一中学校	小林金次郎	昭和24年9月
23	相馬市立中村第一小学校	和田甫	昭和25年7月
24	会津高田町立高田中学校	小林金次郎	昭和25年9月
25	福島市立福島第四中学校	小林金次郎	昭和26年2月
26	磐城郡山田第一小学校（いわき市立菊田小学校）	下山田光平	昭和26年
27	福島市立福島第三小学校	一谷清昭	昭和27年3月
28	白河市立白河中央中学校	大谷忠一郎	昭和27年10月
29	いわき市立久之浜第一小学校	西條八十	昭和28年7月
30	福島県立福島工業高等学校	野村俊夫	昭和28年10月
31	会津若松市立鶴城小学校	松平信子	昭和28年11月
32	郡山市立赤木小学校	丘十四夫	昭和28年11月

古関裕而と福島との関係性

	校 歌 の 学 校 名	作 詞	作曲年月
33	国見町立藤田小学校	小林金次郎	昭和 28 年 12 月
34	真野村立真野中学校	和田甫	昭和 29 年 11 月
35	会津若松市立城北小学校	星野健	昭和 29 年 12 月
36	相馬市立中村第二中学校	松田亨	昭和 30 年 1 月
37	二本松市立小浜中学校	源後三郎	昭和 30 年 2 月
38	国見町立県北中学校	白鳥省吾	昭和 30 年 3 月
39	福島県立小高商業高校（生徒会の歌）	野村俊夫	昭和 30 年 10 月
40	会津高田町立赤沢中学校	梁取三義	昭和 30 年 11 月
41	南会西部高等学校（福島県立南会津高等学校）	梁取三義	昭和 31 年 12 月
42	いわき市立小名浜第一中学校	神保光太郎	昭和 32 年 2 月
43	南相馬市立原町第二小学校	和田甫	昭和 32 年 2 月
44	福島県立福島商業高等学校	野村俊夫	昭和 32 年 10 月
45	飯舘村立草野中学校	和田甫	昭和 32 年 10 月
46	相馬市立飯豊中学校	和田甫	昭和 32 年 10 月
47	福島市立福島第二小学校「風だ光りだ」	野村俊夫	昭和 32 年 11 月
48	伊達市立松陽中学校	野村俊夫	昭和 32 年 12 月
49	伊達市立桃陵中学校		
50	郡山市立高瀬中学校	源後三郎	昭和 32 年 12 月
51	田村市立移中学校	丘灯至夫	昭和 32 年
52	石井中学校	和田甫	昭和 33 年 1 月
53	相馬市立桜丘小学校	和田甫	昭和 33 年 2 月
54	磐梯町立磐梯第一小学校	与田準一	昭和 34 年 1 月
55	福島市立福島第四小学校	野村俊夫	昭和 34 年 10 月
56	福島市立清水小学校	野村俊夫	昭和 34 年 11 月
57	河東町立河東第一小学校	野村俊夫	昭和 35 年 3 月
58	喜多方市立第二中学校	野村俊夫	昭和 35 年 10 月
59	白河市立白河第三小学校	大谷忠一郎	昭和 36 年 5 月
60	白河市立信夫第二小学校	岡崎淑郎	昭和 36 年 9 月
61	岩代町立旭中学校	東野辺薫	昭和 37 年 3 月
62	会津本郷町立本郷第一小学校	坂内萬	昭和 37 年 3 月
63	湯川村立湯川中学校	坂内萬	昭和 37 年 10 月
64	北会津村立荒舘小学校	坂内萬	昭和 37 年 10 月
65	棚倉町立近津中学校	和田甫	昭和 37 年 10 月

古関裕而と福島との関係性

	校 歌 の 学 校 名	作 詞	作曲年月
66	西郷村立羽太小学校	丘灯至夫	昭和 37 年 11 月
67	福島県立喜多方工業高等学校	星野哲郎	昭和 38 年 10 月
68	福島県立喜多方工業高等学校 (応援歌)	星野哲郎	昭和 38 年 10 月
69	相馬市立八幡小学校	和田甫	昭和 39 年 1 月
70	喜多方市立堂島小学校	慶徳宏	昭和 39 年 2 月
71	浪江町立幾世橋小学校	和田甫	昭和 39 年 5 月
72	相馬市立向陽中学校	和田甫	昭和 40 年 4 月
73	田村市立要田小学校	遠藤喜美治	昭和 40 年
74	矢吹町立矢吹中学校	菊池貞三	昭和 41 年 2 月
75	矢祭町立石井小学校	和田甫	昭和 41 年 2 月
76	保原町立富成小学校	野村俊夫	昭和 41 年 12 月
77	福島県立会津高等学校	柳沢健	昭和 42 年 2 月
78	矢祭町立矢祭中学校	藤田清	昭和 42 年 6 月
79	福島市立松陵中学校	藤田正人	昭和 42 年 8 月
80	伊達町立伊達中学校	高橋新二	昭和 42 年 11 月
81	郡山市立桑野小学校	丘灯至夫	昭和 44 年 1 月
82	福島市立森合小学校	草野心平	昭和 44 年 2 月
83	日本大学工学部 (学部歌)	山本将雄	昭和 44 年
84	鮫川村立鮫川小学校	内海久二	昭和 45 年 2 月
85	いわき市立植田中学校	門田ゆたか	昭和 46 年 1 月
86	白河市立大信中学校	丘灯至夫	昭和 46 年 2 月
87	川俣町立川俣中学校	本多青華	昭和 46 年 9 月
88	国見町立藤田小学校 (讃歌)	草野心平	昭和 48 年 10 月
89	東北歯科大学	房前智光	昭和 49 年 8 月
90	福島市立吾妻中学校	藤田正人	昭和 49 年 9 月
91	福島県立郡山商業高等学校 (青春歌)	丘灯至夫	昭和 50 年 11 月
92	福島県立郡山商業高等学校 (応援歌)	丘灯至夫	昭和 50 年 11 月
93	いわき市立汐見が丘小学校	永山定枝	昭和 51 年 2 月
94	古殿町立古殿中学校	丘灯至夫	昭和 51 年 2 月
95	月舘町立月舘小学校	草野心平	昭和 52 年 9 月
96	二本松市立東和中学校	丘灯至夫	昭和 53 年 8 月
97	福島市立北沢又小学校	草野心平	昭和 55 年 1 月
98	福島市立蓬莱中学校	丘灯至夫	昭和 56 年 2 月

古関裕而と福島との関係性

	校歌の学校名	作詞	作曲年月
99	二本松市立二本松第三中学校	丘灯至夫	昭和56年11月
100	田村市立船引南中学校	丘灯至夫	昭和57年12月
101	福島市立蓬莱東小学校	草野心平	昭和58年2月
102	南相馬市立鹿島中学校	草野心平	昭和59年2月
103	福島市立清水中学校	草野心平	昭和60年3月
104	川俣工業高校（応援歌）	不明	不明
105	保原町立富成中学校	不明	不明
106	いわき市立緑ヶ丘幼稚園	緑川良美	不明
107	郡山市立多田野中学校	不明	不明
108	原町市立大甕中学校	不明	不明
109	北会津村立荒館中学校	梁取三義	不明
110	大信村立信夫中学校	不明	不明
111	中畑中学校	大谷五花村	不明
112	福島県立塙高等学校	丘灯至夫	不明

福島市古関裕而記念館所蔵史料から作成。

じが重くなりしますので、若い人達の唱ふ校歌に、ふさわしい曲を書くのに苦心しました。これでも少し固すぎますが、かへって、この位の壮重味があった方が、良いかとも存ぜられます。速度は指定して置きました故、成る可くこのテンポで唱はれる様にお願ひします。曲の都合で、最後の行の『われら』を繰返して『われら、われら』と致しました。この方がずっと面白が着きます、「それから四番目の二行目『わが学び舎』の処だけが六音節で非常に唱ひにくいと思ひますので、是非七音節の言葉を入れられる様に希望します」と書いています。⁵³生徒たちの歌い易さを考慮し、固くなりすぎないようにする配慮などが伝わってくる。

福島市のナンバースクールの小学校で古関作曲の校歌を制定したのは、昭和十七年（一九四二）の第四小が早く、昭和二十七年に第三小、同三十二年に第二小と続いている。最初の第四小学校では、昭和三十四年の創立五十周年に新校歌に替えたが、この作曲も古関であった。十月十五日の記念式典では同窓会長橋登が校歌完成までの経緯を説明し、古関と作詞の野村俊夫を紹介した。⁵⁴両者と旧知の橋が作詞と作曲を依頼したと見てよい。

戦後に新校歌を制定しているのは、戦後教育では歌詞に不適切と判断されて歌えなくなった部分が出てきたからであった。福島第三小学校でも戦後に歌詞が問題となった。しかし、同校では戦前からの校

歌の文言を変えるのではなく、新校歌を制定するごととした。古関と交際のあったPTA委員佐々木登美が作曲を依頼した。昭和二十七年三月二日に制定された新校歌は、古関が行進曲として用いることもでき、ハ長調の器楽曲に編曲もできるように工夫している。⁽⁵⁵⁾

この作曲依頼から完成までの過程では、ちよつとした問題が起こった。それは職員会議で作曲者を古関に決めるときに、佐々木が「古関先生は、私の昔の教え子であるから、作曲料は無料にしてもらうように話をするから、古関先生に依頼してはどうか」と発言したことによる。この姿勢に接した古関は、「自分の芸術に対して、無償と言うことはないだろう、三小は母校ではあるが、芸術には一応評価と言うものがある」と、毅然とした態度で応じた。そこで在校生からの寄付金とPTA会費とで二万円を用意している。⁽⁵⁶⁾

こうした経緯を見ると、古関は作曲料に厳しかったとの誤解を招きかねない。古関が難色を示したのは、最初から無料を前提に話を持ってきたことと、恩師である遠藤喜美治、坂内萬、丹治嘉市ほど親密な関係ではなかったことが考えられる。依頼の仕方が悪かったことは、北海道豊幌小学校の校歌を無料で作曲したことが証明している。昭和三十三年に同校校長渡辺文吾は古関が「へき地校の為に校歌作曲奉仕」をしていると聞きおよび、作曲料が用意でき

ないことを率直に伝えて校歌の作曲を依頼したようだ。

この書翰に対して古関は、「学校の校歌の作曲はよろこんで致して居ります。幼い子供達に大きな夢を持たせ次代を負ふ児童の心の糧にもと、いつも、よろこんで作曲して居りますが、当方から進んで作曲奉仕をする迄には行つて居りません。毎日々多忙の為、そこまでは手が廻りません。しかし、御手紙を拝見致し、同じ福島県の御出身であり、小生も小学校を師範附属で過ごしましたし、又、渡辺徳太郎君の後輩とか。北海道の開拓地で子供達の教育に専念される先生方のお話を伺つて今度の校歌作曲、承知致しました。作曲料は奉仕致しますが、あまり他校に御吹聴下さらぬ様お願い致します。『小生を友人関係だから』とでもお話してください。歌詞は成る可く早目にお送り下さい。作曲期間は約一ヶ月頂きたく存じまう」と返信している。⁽⁵⁷⁾

決め手は、学校側が困窮していると理解したことと、依頼主が福島県出身で知人の後輩であったことであろう。古関が書翰を書いた昭和三十三年九月四日頃は、舞台や映画音楽の作曲で繁忙期を迎えていた。そのため、構想から完成まで校歌作曲に約一月を要したことがうかがえる。十月九日付の古関の書翰では「単純な中に明るさと楽しさを……と思つて書きました。終わりの方二部合唱にとの事でその様にしました」と校歌の完成を伝え、「開拓民の人々

のへき地の由、何かと御不自由の事と御見ます。実は家の子供の読み古した本が沢山ありますので御校の児童達に読んで貰ったらと思ひ、家の者と話合つて居ります」という心遣いを見せている。⁵⁸

さらに十月二十三日の書翰では「校歌如何ですか。永く愛唱いて頂けたら幸甚です。本日、家の子供の読み古しのをですが少々お送り致しました。一箇で重量二四キロ。少々重いかも知れませんが」と報じている。⁵⁹これにより豊幌小学校に図書室ができたという。渡辺が「リンゴ二箱」を返礼として送ると、古関は「本日は何よりの品、皆々様御丹精のみのりの物をたくさんお送り頂き厚く厚く御礼申し上げます」と感謝の意を示している。⁶¹福島県出身というつながりから生まれた校歌だが、古関が芸術評価に対する厳しい姿勢を内面に秘めている一方で、弱者に対する優しい人柄がにじみ出ている。

戦後に作り変えた校歌のうち、昭和三十二年に作曲した福島商業高等学校の新校歌「若き心」(作詞…野村俊夫)は、古関にとつて感慨深い一曲となった。新校歌は創立六十周年記念事業として作られた。記念式典に出席した古関は、「皆さんは若い、希望がいっぱいある。私は福商時代、音楽で身をたてたいと願っていた。今希望通り、音楽に生きています。君達も、何になりたい、何かをやりたいと思つたら、どうすればなれるか、今何をやれば良いかを、本気になって考えて、けっしてあきれめないで、な

りたい、なりたいと希望しつづけることが大切です」と、生徒たちに熱弁した。⁶²新校歌「若い心」には、そうした思いが込められていた。

福島県の学校関連の楽曲として特筆すべきものとして、昭和三十四年八月に作られた「福島県中学校選抜野球の歌」がある。これは題名どおり、県大会出場を目指して行われた選抜野球の歌として、福島民報社とヤクルト山田とで企画された。作詞には丘灯至夫、作曲には古関が選ばれた。八月十三日に会津若松市の第二中学校体育館で発表された。⁶³この曲は、古関が福島のために作曲した「栄冠は君に輝く」と位置づけられる。

昭和四十年以降は新設校が増加するが、すでに福島県内の多くの校歌を作曲していたこともあり、古関への作曲依頼は止まなかった。その一つが昭和四十二年四月開校の福島市立森合小学校である。同校には校歌がなかったため、五月の修学旅行ではバスガイドから「校歌を歌ってきかせてください」といわれて、生徒たちは「とまどったような、悲しいような、恥かしいような顔」をしていたという。これを見た校長は早く校歌を制定しなければならぬと感じた。昭和四十三年(一九六八)十一月に作詞者と作曲者に各十五万円(昭和四十三年の小学校教員の初任給が二万四千円)の予算を決定し、古関には福島師範附属小学校で同級生であった県会議員紺野洋介を介して依頼した。⁶⁴

前章で述べた猪苗代国体の讃歌でも仕事をしたため、以後校歌の作詞を依頼された草野は作曲者に古関を推薦することもあった。それは昭和五十二年（一九七七）十月に発表された「月舘小学校校歌」の制作過程からわかる。五月十一日に作詞を依頼された草野は、九月三日に詩を完成させると、七日に古関に作曲依頼を行っている。十三日に草野は学校に作曲完成を伝えているため、古関は六日間で作曲したことがわかる。⁶⁵

古関は月舘小学校職員に宛てた書翰で、「児童達が元氣よく大きな声で唱和するのが、最も大事なことです。その点だけ注意して下さって、ピアノ伴奏等にはあまりこだわりなくて結構です。旋律だけは正確に教えて下さい」と指摘している。そして「月舘の町も久しく見ません。白い土蔵造りの町並が印象に残っています。私と縁故の深い川俣の隣の町として印象は深いです。秋深まると田舎の幼ない日々を思い出し、しめじ等の茸刈り、栗拾い、甘柿、渋柿等、どれもが遠い彼方からよみがえって来ます」という。⁶⁶北海道の豊幌小の校歌は一月を要したが、見慣れた月舘の風景からは六日もあれば曲想が湧いて出てきたのである。

草野は月舘小学校の校歌の作詞に際して「月舘を書こかうと思ふが、小学校の校歌は一番むづかしい。大学がいちばん楽だ」、「口語の校歌をつくらうとしたが、結局こんな具合になってしまった。小学

生には少し六ヶ敷いと思ふがカンベンしてもらはう」と、書き残している。⁶⁷平易な歌詞でないと小学生たちが理解できないため、小学校の校歌は難しいという。

古関は草野と、昭和五十四年四月に開校した福島市立北沢又小学校、同五十六年四月に開校した福島市立蓬萊東小学校の校歌でも一緒になった。昭和五十五年（一九八〇）一月に「伸びやかで歌いやすく、歌うほどに味わいが出る」という「北沢又小学校校歌」が完成すると、古関は「元氣に明るく歌って下さい」と述べている。⁶⁸昭和五十八年（一九八三）二月に制定された「蓬萊東小学校校歌」では、「子供達がすぐ唱えるように書きました」、「音域は小学校の皆さんなら、唱える音域です」という書翰を送った。⁶⁹

古関が最後に作曲した福島の校歌は、昭和六十年（一九八五）三月の「福島市立清水中学校校歌」だが、この作詞も草野であった。福島商業高校出身の初代PTA会長が、古関に「高校の先輩を理由に強引に作曲をお願い」した。⁷⁰同校所蔵の楽譜には古関の字で「こころやさしく」と書かれているが、その通り明るく歌い易い。小中学校ではピアノ伴奏のものがほとんどだが、高校のように管絃楽器でレコーディ化されれば格調の高さが際立つ。それらは古関が郷里の学校のため、固くなりすぎず、明るくて、歌い易さを重視して作曲したからである。

おわりに

古関は職業作曲家になるため昭和五年に上京したが、その後も福島を忘れることはなかった。昭和十二年に「露営の歌」が大ヒットして全国的に知名度が上がると、作曲家の技術力を母校や郷里のために役立てようとした。昭和二十三年に母校が火災で焼失したときには、復興募金を目的としたイベント開催に向けて積極的に動いた。福島県の戦後復興期から高度経済成長期には、多くの新民謡を作曲している。古関に作曲依頼が来たのには、コロムビアレコードに福島県出身者が多かったことも大きかった。福島県内の新民謡の作曲にあたり、古関はそれが観光や地域振興につながることを望んでいた。その集大成ともいえるものが、現在も福島市民の夏祭りですべて使われている「わらじ音頭」であった。古関が作曲した新民謡は、日本人が好む哀愁のある短調のメロディーが多い。

新民謡と同時並行して社歌・団体歌・イベントソングが生まれた。福島駅前の高いビルから市街を見渡すと、東邦銀行、大東銀行、福島トヨタ、東洋紡など、古関が社歌を作曲した企業の看板が散見される。一般的には知られていない福島刑務所や複数の障害者施設のためにも腕を振った。どれも力強く元気が湧いてくる。それらの集大成ともいえる傑作が猪苗代国体の賛歌と行進曲である。

そして古関は県内の百曲以上の校歌を作曲した。

福島県に生まれれば、小学校から高等学校までの間に、古関が作曲の校歌を持つ学校に通学する確率が少なくない。社歌に比べれば安い作曲料であったが、頼まれれば断らなかつた。北海道の豊幌小学校の事例からは、古関の弱者に対する人の良さが見て取れる。一方で福島第三小学校の事例からは、自分の作品に対する芸術家としての厳しい姿勢がわかる。古関は忙しくても決して手を抜かなかつた。そして完成した直筆の楽譜とともに、その作品をどう歌うかのアドバイスを記している。校歌は固くなりすぎず、歌い易くて、明るくなる点を重視していた。

古関は職業作曲家になってからは、楽器を使つて作曲することがなかつた。日本全国各地の風景から湧き出してくるメロディーを五線紙に書いていった。古関は自分の作品について「私の作った曲なんかにしてもですね、細かく分析して行くと、東北特有の民謡の節が流れてると思うんです。作曲している時に、ふいに阿武隈川が目に見えて、子供の頃のことを思い出したりしまして、自分の少年時代を過ぎた故郷の土地の山とか水とかの風景の影響が、私の作品の中に出ていると思うんです」と述べている。¹⁷⁾

古関メロディーには、必ずどこかに福島の風景から湧き出たものが含まれているという。福島県のために書いた楽曲であれば、その要素はより強くなつただろう。昭和三十三年六月十五日に福島と東京間

の長距離市外電話の即時通話の開通記念式が行われた。この式場で福島市長林谷主計は電話開通の相手に古関を選んだ。当時の『福島民報』では「二人の喜びの声が会場に流れる。「故郷が近くなりましたネ」古関さんの声は感激にひたっているようにハズんで聞える」と報じている。福島市で最大の文化功労者であるという評価のあらわれといえる。昭和五十四年四月に古関が福島市名誉市民の第一号に選ばれたのも、二十年間に古関に対する評価が変わらなかったからである。古関裕而記念館が設立され、古関の死後に古関裕而音楽祭が継続され、NHKの朝ドラ「エール」のモデルとして古関が選ばれたのも、同じ流れとして考えられる。

古関は福島県の会社、団体、学校からの依頼に応じて、社歌、団体歌、イベントソング、新民謡、校歌を作り続けた。古関は日本を代表する作曲家の一人になっただけでなく、常に福島県民の期待に応える仕事をしてきた。その思いが作品を通して福島県民に届いたからこそ、古関を顕彰する動きにつながっているのである。

註

- (1) 「令和二年十二月福島市議会定例会議会議録」(福島市議会所蔵)。
 (2) 齋藤秀隆『古関裕而物語』歴史春秋出版株式会社、二〇〇〇年七月は、古関の出身校である福島商業学校との関係に

ついて紹介しているが、それを除くと「エール」ブームのなかでは多くの関連書籍が登場したものの、どれも古関が職業作曲家となつてからの福島県との関係については書かれていない。

- (3) 拙著『古関裕而』中公新書、二〇一九年十一月。
 (4) 『福島民報』一九三八年五月二十三日、朝刊。
 (5) 同右、一九三八年六月二十一日、夕刊。
 (6) 同右、一九三八年七月二十三日、夕刊。
 (7) 同右、一九三八年七月二十五日、朝刊。
 (8) 福島県立福島商業高等学校創立百周年記念事業実行委員会編『久遠の希望に』一九九七年、三一頁。
 (9) 同右、三二頁。
 (10) 同右、三六～三七頁。
 (11) 同右、四三頁。
 (12) 同右、四〇頁。
 (13) 『福島民報』一九四八年五月三十一日、朝刊。
 (14) 同右、一九四九年八月十一日、朝刊。
 (15) 同右、一九四九年八月二十一日、朝刊。
 (16) 同右、一九五〇年四月二日、朝刊。
 (17) 同右、一九五二年三月一日、朝刊。
 (18) 同右、一九五四年六月六日、朝刊。
 (19) 「『瓶章宛丘十四夫書翰』(昭和三十一年) 四月六日(二瓶晃一氏所蔵)。
 (20) 同右、(昭和三十一年) 四月十二日(同右)。
 (21) 『古関裕而―鐘よ鳴り響け―』日本図書センター、一九九七年、二三四～二三五頁。
 (22) 同右、(23) 大竹作摩、古関裕而「福島」(『週刊サンケイ』一

古関裕而と福島との関係性

- (24) 九五四年八月二十二日号)。
株式会社柏屋提供史料。
- (25) 『福島民報』一九六六年四月二十九日、朝刊、夕刊。
- (26) 同右、一九七〇年二月五日、朝刊。
- (27) 『萩内誠治宛古関裕而書翰』(昭和四十五年) 五月九日(國分章太郎氏所蔵)。
- (28) 同右、(昭和四十五年) 五月十二日(同右)。
- (29) 『福島民報』一九七〇年七月五日、朝刊。
- (30) 竹田綜合病院提供史料。
- (31) 『東邦銀行五十年史』株式会社東邦銀行、一九九二年、一八〇～一八二頁。
- (32) 『福島民報』一九四九年一月十五日、朝刊。
- (33) 『東北電力株式会社五〇年のあゆみ』東北電力株式会社、二〇〇一年、一〇～一二頁。
- (34) 小林金次郎『古関裕而と福島』緑の笛豆本の会、一九八八年、六頁。
- (35) 『ラジオ福島開局五〇年の歩み』株式会社ラジオ福島、二〇〇三年、一一頁、三〇頁。
- (36) 『東邦ゴム工業株式会社「社史」』東邦ゴム工業株式会社、二〇〇〇年、一二六～一二七頁。
- (37) 『古関裕而宛文書』昭和三十五年三月一日(福島刑務所所蔵)。
- (38) 『高橋清宛古関裕而書翰』昭和三十五年三月十一日(同右)。
- (39) 前掲註(37)。
- (40) 前掲註(38)。
- (41) 『高橋清宛古関裕而書翰』昭和三十五年十月二十四日(同右)。
- (42) 『小林金次郎先生の著作を祝い励ますつどい』一九七二年五月二十七日(福島市古関裕而記念館所蔵)。
- (43) 前掲『古関裕而と福島』一〇～一三頁。
- (44) 協三工業株式会社には社歌に関する史料が現存しない。福島市古関裕而記念館所蔵の社歌関連史料。
- (45) 福島トヨタ自動車株式会社提供史料。
- (46) 福島市古関裕而記念館所蔵の社歌・団体歌の関連史料、日本コロムビアレコード所蔵のレコード「レベコピ」、レコードジャケット。
- (47) 『福島民報』一九七二年十月十七日、朝刊。
- (48) 同右、一九七三年三月二十三日、朝刊。
- (49) 同右、一九七四年二月十八日、朝刊。
- (50) 福島市古関裕而記念館所蔵の校歌関連史料。
- (51) 山崎健一編『原高ものがたり八〇』私家版、二〇一九年、二九頁。
- (52) 『創立六十周年記念誌』一九九九年、四二頁。
- (53) 『多田利男宛古関裕而書翰』五月四日(福島県立原町高等学校所蔵)。
- (54) 『福島四小のあゆみ』福島市立福島第四小学校、二〇一九年、六五頁、九四頁。
- (55) 『福島第三小学校校長宛薄井冬民書翰(福島第三小学校校歌の制定過程)』一月二十六日(福島市古関裕而記念館所蔵)、『浜辺百年のあゆみ』福島三小創立百周年記念事業、一九八四年、九〇～九二頁。
- (56) 『渡辺文吾宛古関裕而書翰』昭和三十三年九月四日(黒松内町教育委員会提供)。
- (57) 同右、昭和三十三年十月九日(同右)。

- (59) 同右、昭和三十三年十月二十三日（同右）。
- (60) 同右、昭和三十三年十一月十九日（同右）。
- (61) 同右、昭和三十三年十二月十日（同右）。
- (62) 前掲『久遠の希望に』四九頁。
- (63) 『福島民報』一九五九年七月十六日、八月十四日、朝刊。
- (64) 鈴木正恵『校歌誕生由来記』森合小学校、二〇〇〇年復刻版。
- (65) 「校歌作成の経過」（月舘学園小学校所蔵）。
- (66) 「月舘小学校職員御一同宛古関裕而書翰」十七日（同右）。
- (67) 『草野心平日記』四、一九七七年八月十九日条、思潮社、二〇〇四年、三二八～三二九頁。
- (68) 『福島民報』一九八〇年二月一日、朝刊。
- (69) 「米畑勇宛書翰」（福島市立蓬萊東小学校所蔵）。
- (70) 『しみず』福島市立清水中学校創立一〇周年記念誌―福島市立清水中学校、一九九三年、一五頁。
- (71) 前掲「福島」。
- (72) 『福島民報』一九五八年六月十六日、朝刊。

〔付記〕 本論は、令和元年度～3年度共同研究「地域社会と歴史遺産」の研究成果による。論文作成にあたり史料の閲覧および提供をくださった、福島市古関裕而記念館、福島市役所、福島刑務所、福島県立図書館、福島市立図書館、株式会社柏屋、竹田綜合病院、株式会社東邦銀行、株式会社ラジオ福島、福島トヨタ自動車株式会社、東邦ゴム工業株式会社、福島県立福島商業高等学校、福島県立原町高等学校、黒松内町教育委員会、月舘学園小学校、福島市立蓬萊東小学校、福島市立清水中学校、二瓶晃一氏、國分章太郎氏に

は、心より御礼申し上げます。

Abstract

This paper examines the company, group, and school songs of Fukushima prefecture composed by Yuji Koseki. We will examine Koseki's feelings towards Fukushima prefecture and explain the special relationship he has with the people of Fukushima.